



(原寸)

阿弥陀浄土院の飾り金具

平城宮東院庭園の東隣り、法華寺阿弥陀浄土院跡から出土した建物の飾り金具です。上は、屋根を支える垂木^{たるき}の先端木口を飾った金具。厚さ1ミリにも満たない銅の薄板を鑿で透彫りにして、対葉花文^{たいようかもん}と呼ばれる唐草文の一種が繊細に表現されています。他の二つは、扉や長押^{なげし}の装飾に用いられた金具で、釘の先端が材の裏に突き抜けたとき、あるいは釘の頭を覆い隠すためのものです。裏側には材に打ち付けるための3本の脚がつけられています。扉の材料を記した木簡から、奈良時代には「尻塞^{しりふたぎ}」と呼ばれていたことがわかります。

これらにはいずれも金のメッキがわずかに残っていて、金色に輝く堂宇^{どうう}の様子をうかがい知ることができるのです。

(平城宮跡発掘調査部 次山 淳)